

疑問表現について

——院政期から室町期までの表現と主格助詞の用法をめぐって——

清水 登

本稿では、疑問表現の用法について院政期から室町期までの資料にもとづき概観しようとするものである。当代の疑問表現については次のような疑問の助詞「カ」、「ヤ」の用法が存し、それらの事実は、「カ」、「ヤ」に対する当代の人々の認識を示すものといえよう。

不知ヤ、我ヲバ誰トヤ云ハム。(今昔物語集・十六・十八)

堂ノ前ノ谷ヲ臨立ケルガ、何ニシケルヤ有ケム、兎ヲ取落シテ谷ニ落入レニケリ。(同 十九・四十一)

東使兩人三千余騎ニテ上洛スト聞ヘシカバ、何事トハ知ズ京ニ又何ナル事ヤ有ズラント、近國ノ軍勢我モ我モト馳集ル。

(太平記・卷二)

「如何ナル事ヤ候ベキ」ト強テ留申ケレバ、(同・卷五)

吾朝秋津島ノ中ニ生レテ、清氏ニ勝ル手柄ノ者有トハ、誰モヤイフ。(同・卷三十八)

以上の「ヤ」は、本来的な用法にしたがうならば疑問の助詞「カ」と交換すべきものと考えられる。

また、『今昔物語集』には次のような「カ」の用法が認められる。

汝ヲバ、誰人トカ云フ。(十七・二)

其渡リ給ヒタリケン人ヲバ誰トカ云フ。(三十三・六)

本来的な用法にしたがったものといえる。

「カ」についても本来的な用法に反する例が認められる。

我が門徒ノ仏法ヲ可伝置カ有ル。

(今昔物語集・十一・二十八)

人カ追テ来ラムズラム。(同・十六・一)

以上のような疑問の助詞「カ」、「ヤ」については次のような山口堯二氏の指摘がある。¹⁾

そこには疑問点の指示性にすぐれた「か」と対他的な解答要求の表示性にすぐれた「や」というような古代語的な機能分担の傾向がもはや崩壊し、もっと別の分担意識が生じていることがうかがえる。『ロドリゲス日本大文典』が中世末の両語の傾向を

Ca(か)とYa(や)は同じ意味を持つてゐる。Ya(や)は話しことばよりも書きことばに多く用ゐる。(土井忠生訳本

* 380 長野市三輪八一四九七 長野県短期大学

三四二頁

と指摘するように、「ヤ」の不定方式の文中用法への進出には、「ヤ」を「カ」よりも文語らしくより典雅であるとみる意識が働いているようである。

それでは、「カ」、「ヤ」の用法を含め疑問表現が院政期から室町期にかけてどのようにあったか、みてみることにしよう。

疑問表現の形式については、山口堯二氏が提起された方式(不定方式、特定方式)により分類・整理することにした。そのような方式により分類・整理したうえで、疑問表現としての性格の面から、問い、疑い、反語の三つに分類することとした。

(一) 今昔物語集における疑問表現

『今昔物語集』における疑問表現について分析・整理した結果が次の表Ⅰ・Ⅱ・Ⅲである。『今昔物語集』における疑問表現がどのような場面において出現しているかにより「会話」、「心話」、「地の文」の別に示してある。ただし、用例は『今昔物語集』の「本朝仏法部」(巻十一―巻二十)と「本朝世俗部」(巻二十二―巻三十一)のみとし、和歌における疑問表現、欠文等により判断不能なものは除いてある。

表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの示す結果より判断されることは次のようなことである。

会話部

- ① 不定方式の問いの分野で「不定方式——ゾ」が圧倒的に多い。
- ② 用例数の少ないものとして「不定方式——ヤ」、「不定方式——カ」を挙げることができる。

「不定方式——カ」は次の一例のみである。

男ノ云ク、「近クハ水不候ハズ。但シ、何ナル事ノ候カ」ト、

(十六・二十八)

- ③ 特定方式の問いの分野「特定方式——ヤ」が多数を占め、「特定方式——カ」がそれに次ぐ。また、「特定方式——カ」は疑いの表現としての特色を發揮している。

心話部

- ① 不定方式の表現として「不定方式——」、「不定方式——ゾ」、「不定方式——カ——」が目立った存在にある。そのなかでも「不定方式——カ——」の存在が注目せられる。『今昔物語集』の会話部において「不定方式——カ——」は、反語の表現としての特色を發揮していたものである。

- ② 特定方式の疑いの表現として「特定方式——カ」、「特定方式——ニヤ(有ラム)」、「特定方式——ヤ——」の存在が注目せられる。

地の文

不定方式の疑いの表現として「不定方式——ニカ(有ラム)」、「特定方式の反語の表現として「特定方式——ヤ」、不定方式の反語の表現として「不定方式——カハ——」の存在が注目せられる。

『今昔物語集』の会話部、心話部、地の文を概観した結果、大略次のようにまとめることができる。

- I 不定方式、特定方式を通じ、「特定方式——ヤ——」のような、内部に「ヤ」の文中用法をもつ形式は後退傾向にある。その反対に「不定方式——ゾ」、「特定方式——ヤ」、「特定方式——カ」のような、文末に「ゾ」、「ヤ」、「カ」をもつ形式は増加傾向にあり、その傾向は会話部において顕著である。

II 会話部において「特定方式——ヤ」は問いの表現としての特色を發揮し、心話部、地の人においては反語の表現としての特

今昔物語集の疑問形式（会話）

巻	表現形式	不定方式														特定方式															
		。。	ゾ。	ヤ。	カ。	ヲ。	ゾー。	ゾーヤ。	ゾーカ。	ゾーヤ。	カー。	カーゾ。	カーヤ。	カーカ。	カーハ。	ヤー。	豈ーヤ。	ソ。	ニカ(有ラム)。	ニヤ(有ラム)。	ゾーカー(ソ)。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤハ。	カーハ。	ニカ(有ラム)。	ヤー。	ヤハ。	カーハ。	
25	問い	3	5																			7	2							1	
	疑い																						1								
	反語		2	2				1							1								5	1		1	1		2		3
26	問い	14	34				1			1	8							4		2		10	10				1	5			
	疑い	3	5								6							1		1	1		1	3				4			
	反語	2	1	1							6				1							1			3						
27	問い	15	27							1	10									1		10	5				1				
	疑い	2	1								5									1			4	3			2				
	反語	1	1								3			2											1			1			
世	問い	8	28							1	5										1	3	8				6				
	疑い	3	17								6		1	1						1			1				2				
	反語	1	1								6			1								9			1			1	3		
俗	問い	7	34							2	4	1						1		1		9	5	1			5				
	疑い	3									2										3			1			3				
	反語	2	1								11				2							3								2	
部	問い	4	12							1	2			1				1		1		2	2								
	疑い	1									1									1					1		1				
	反語										6			1								1			1						
31	問い	4	14								3						2				1	3	2				1				
	疑い		2								2							3				1		3							
	反語	1									7	2	1										1								
世	問い	114	412		1	9	20	1	1	2	92	4		1	1		14	9		6	131	69	34	1		1	25	17			
	%	17	60			1	3				13						2	1		1	47	25	12				9	6			
	疑い	29	35		1	2	2		1	2	42		1	2	1			9	1	9	1	21	12	11		1	19	6			
	%	21	26								31							7		7		30	17	15			27	8			
世	反語	10	13	3			11	4	2		2	116	3	3	18	1				1	20	16		3	7		4	9	9		
	%	5	7				6				62				10						29	24		4	10		6	13	13		

今昔物語集の疑問形式 (心話)

巻	表現形式	不定方式											特定方式											
		。	ゾ。	ゾー。	ゾーゾ。	ゾーヤ。	ゾーニカ(有ラム)。	カー。	カーゾ。	カーハ。	ソ。	ニヤ(有ラム)。	ゾヤ。	ニカ(有ラム)。	ヤラム。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤー。	ヤーハ。	カー。	ニカ(有ラム)。	ヤハ。	カハ。
25	問い																							
	疑い	1					2									1		8						
26	反語							1											2					
	問い																							
26	疑い	10	8		1		4						8		6	6	7			1			1	
	反語							1										1						
27	問い																							
	疑い	8	5				3						7		6	5	10							
28	反語																							
	問い																							
28	疑い	4	5			1	6		1				7				7	7						
	反語		2												3				1				1	
29	問い																							
	疑い	8	5				1						14	1		3	8	6						
30	反語						3		1														1	
	問い																							
30	疑い	4	1				2					1	1			2	5	3				1		
	反語						3		3						1								1	
31	問い																							
	疑い	13	11			1	3						8		1	1	7	3						
31	反語								1															
	問い																							
%	疑い	81	57	2	1		3	42	4	2	1	2	1	90	1	4	68	70	76		2	2		4
	反語	28	20					15	1					32		2	30	31	34		1	1		2
%	疑い	3	2		2		18	20					1	6	1		1	5					3	
	反語	7	4		4		39	43					2	38	6		6	31					19	

色を發揮している。「特定方式——カ」は問い、疑い、反語の分野において目立った傾向は認められない。

以上の結果については次のような阪倉篤義氏の指摘がある。⁽³⁾

ここにおいて、この「——ヤ」の形式に代って盛んに用いられ出したのが「——カ」の形式であった。この形式は平安時代においてすでに存在したが、文の叙述が終止形でいちおう完了したところに「ヤ」を添えて、これをそのまま相手に持ちかけるかたちをとる「——ヤ」に対して、これは、叙述を一度、連体形によって体言的に取り纏めて、それを疑問点として指示することになる。情意的に傾くようになった「——ヤ」の疑問文に対して、この「——カ」は、端的に疑問点を相手に示す、いわばドライな「問い」になりうるものであった。『今昔物語集』あたりから以後、この形の肯否的疑問文（筆者注、特定方式に相当する）が盛んに用いられたのは、資料の性格もあろうけれども、そこに、やはり疑問表現の時代的推移を見ることができよう。

(一) 保元物語、平治物語における疑問表現

『保元物語』、『平治物語』における疑問表現について分析・整理した結果が表IVである。『今昔物語集』と同様に「会話」、「心話」、「地の文」の別に示してある。表IVの示す結果より判断されることは次のようなことである。

① 『今昔物語集』で認められたように「ゾ」、「カ」による文末用法が会話部を中心として拡大し、その反面、「不定方式——カ——」、「特定方式——ヤ」は反語表現としての性格を強め、後退傾向にある。

② 「特定方式——ヤ」の後退にともない、特定方式において問

いは「特定方式——カ」、疑いは「特定方式——ヤ——」、反語は「特定方式——ヤ」とする関係が形成されつつある。

③ 不定方式において「不定方式——カ——カ——」の形式が一例認められる。このことは疑問詞または疑問語の機能的低下を示すものとみることもできよう。『平治物語』の例は次の通りである。

いかゞしてか雅氣ごゝちうしなふべき。(下)

疑問表現として、「いかゞ」（いかにか）に含まれている「カ」と「いかゞしてか」の「カ」とが重複したものとみることができ、疑問語（いかゞ）の機能的低下を示すものと考えられる。『今昔物語集』にも次のような疑問語に含まれる「カ」と文末用法としての「カ」が重複する例が存し、阪倉氏による指摘がある。

後ノ山ノ方ニ糸哀レ氣ナル音ニテ鹿ノ鳴ケレバ、男今ノ妻ノ家ニ居タリケル時ニテ、妻ニ、「此ハ何ガ聞給フカ」ト云ケレバ、

(三十一・十二)

(二) 太平記における疑問表現

『太平記』における疑問表現について分析・整理した結果が次の表Vである。表については「会話」、「心話」、「地の文」の別に示してある。また、和歌、文書よりの用例は除いてある。表Vの示す結果より判断されることは次のようなことである。

① 不定方式において、「不定方式——カ——」は、とくに心話、地の文において疑い、反語の表現形式としての性格を強めつつある。

② 特定方式においては、問いの表現形式として「特定方式——カ」が優位にたっている。「特定方式——ヤ——」は疑い、反語の表現としての性格を強め、「特定方式——カ」は疑いの分

表IV 保元物語・平治物語の疑問形式

資料名		表現形式	不定方式													特定方式									
			。	ゾ。	カ。	ソ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。	カ。				
保元物語	会話	問い	13	11		8										7	9		3						
		疑い	6	1		3	1	1	1		1	4					15	2	10			2			
		反語	4	2		35	2	22		2		3			2	15	1		3	5			2		
	心話	問い																							
		疑い	3	1		3			1		1	3	1	1	1			2	6		2				
		反語				4		7																	
	地文	問い																							
		疑い	5			11		1	1		1			2			3	18	9						
		反語	1			7		6								1									
	平治物語	会話	問い	32	40	1	6	14		1		1	1	3					28	6					
			疑い	6	4		7	1				2	3					1	11	9					
			反語	6	3		35			2								6	1	3					
心話		問い																							
		疑い	3			3						3						4	1	12					
		反語	1			3																			
地文		問い																							
		疑い	5	1														1	4	12					
		反語				3																			
	問い		45	51	1	6	22		1		1	1	3				7	37	9						
		%	34	39		5	17						2				13	70	17						
	疑い		28	7		27	1	1	2	3		5	13	3	1	1	1	34	27	58	2	2			
		%	30	8		29	1	1	2	3		5	14	3	1	1	1	27	22	47	2	2			
	反語		12	5		87	2	37		2		3				2	22	2	6	5			2		
		%	8	3		58	1	25		1		2				2	59	5	16	14			5		

表V 太平記の疑問形式

表現形式	不定方式																特定方式															
	。。	ゾ。	ヤ。	カ。	ゾー。	ゾーヤ。	ゾヤ。	カー。	カーゾ。	カーヤ。	カーカー。	カーゾヤ。	カーハ。	ヤー。	ヤーゾ。	ヤーゾヤ。	ヤーヤラム。	ニカ(有ラム)。	ニヤ(有ラム)。	ソ。	ソヤ。	豈ーヤ。	カハ。	ヤラム。	ヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤー。	ヤーハ。	ヤラム。	カヤ。	モノカハ。
会話	問い	27	101		1	1		23	64	2							3	1		6				27	11	23	1	20		3		
	疑い	2						1	12															3	4	88	5	37		8		
	反語	7	2	1		8	11	5	216	1	5			11	2	1	1					29	1	1	46	6		61	1		1	
心話	問い																															
	疑い	18	7					5	57									2	1					17	14	92	3	129		1	1	
	反語	2				1			35		1			5	1			1			1	1						1	2			
地文	問い																															
	疑い	10	1					5	44		1								2					2	2	10	80	25				
	反語	2				2	1		46				21									8			10							
	問い	27	101		1	1		23	64	2							3	1		6				27	11	23	1	20		3		
	%	11	39					9	25								1			2				11	19	40	2	34		5		
	疑い	30	8					11	113		1							2	3					22	20	190	88	191		9	1	
	%	16	4					6	59									1	2					12	4	38	18	38		2		
	反語	11	2	1		11	12	5	297	1	6			37	3	1	1				1		1	1	56	6		62	3		1	
	%	3				3	3	1	69		1			9										9		43	5		48	2		

野に侵入しつつかある。

反語の表現は「特定方式——ヤ」ならびに「特定方式——ヤー——」によっている。

全体的にいえることは、「特定方式——カ」が問い、疑いの表現形式として定着しつつかあるということである。

(四) 天草版平家物語における疑問表現

『天草版平家物語』について分析・整理した結果が次の表VIである。表については「会話」、「心話」、「反語」の別に示してある。また、和歌よりの用例は除いてある。表VIの示す結果より判断されることは次のようなことである。

① 不定方式においては、問い、反語の分野で「不定方式——ゾ」が圧倒的な占有率を誇っている。その他「不定方式——カ」が疑いの分野でそれに次ぐ。反語の分野では「不定方式——カ——」ならびに「不定方式——カ——ゾ」がそれに次ぐ。

② 特定方式においては、問い、疑い、反語の分野で「特定方式——カ」が圧倒的な占有率を誇っている。

全体を通して不定方式には「不定方式——ゾ」が、特定方式には「特定方式——カ」が優位にたっている。注目させられることとしては「カ」の文末用法が不定方式にも定着しつつかあることである。

表VI 天草版平家物語の疑問形式

表現形式	不定方式											特定方式									
	。。	ゾ。	カ。	ソ。	カ。	カゾ。	カヘ。	カヘゾ。	ゾヤ。	ゾゾ。	ゾカ。	ゾゾヤ。	ゾヤ。	カ。	ニヤ(有ラム)。	ヤ。	ヤカ。	カ。	ニカ(有ラム)。	モノカ。	ヤラ。
問い	33	142	9	7	4	1						1	1	1	95		5				
%	15	65	13	3	2									95		5					
疑い	14	27	23		18	1								144	1	18	1	1	2		1
%	17	33	28		22									86		11			1		
反語	5	58	5		16	18	2	3	1	2				18		4				5	
%	5	53	5		15	16	2	3		2				67		15				19	

(五) 主格助詞と疑問表現

疑問表現と主格助詞との関係について柳田征司氏は次のように述べておられる。⁵⁾

中世においては、文末の「カ」による要判定の疑問表現が、一般に、古代において区別されていた二種の疑問(筆者注、文中の「ヤ」、文末の「カ」)を表現することになった。ところが、ここに一つだけ例外があり、疑問の対象が主格に対してである場合には、二つの疑問が区別されえたものと見られる。

○(孫一)へか様の事は片時もいそひだがよひものじや。さらばかうおじやれ。(孫二)へいやたよそなたのおじやれ。(孫一)へさらば某が参らふか。(孫二)へ中々の事。おじやれ。(虎明本狂言||薬水)

○(丹波)今一度帰つて。お奏者にもわらはしまらせうずと存る。(奥筑紫)へそれは一段よからう。(丹波)へいざいざさらばもどらう。(丹波・奥筑紫)へ申々。(奏者)へ汝らはまだ下らぬか。(同||筑紫の奥)

前者の疑問は、「参らふ」かどうかを問うているのではなく、先に行くのが「某」であるかどうかを問うている。それに対して、後者の疑問は、下らないのが「汝ら」かどうかを問うている。この二つの違いは、現代語の場合から考えて、主格の後の助詞が、「が」であるか、「は」であるかによって区別されていると見てよいのではないかと思われる。即ち、この場合には、古代語で、

某や参らむ。

と、文中の「ヤ」で表現された疑問が、主格助詞「ガ」によって示されていると言ってよいのではないかと見られる。

某が参らうか。

そして、この二つの表現の間に、文中の「ヤ」が衰退した原因があるのではないかと、筆者は考える。ただし、「ガ」が常に主格についての疑問表現に用いられたのではないこともつけ加えておかななくてはならない。反語や疑いの場合には、述部の方を疑うのに「ガ」が用いられた例がある。

是に案内者がいらうか。はりだこといふは、両に皮を引張つて、まほりにいほが有程に、よう見て買うて来い。

それでは、院政期、文末に「カ」を置く疑問表現の主格助詞の実態はどうであったか。特定方式(要判定の疑問表現に相当する)について『保元物語』、『平治物語』から具体例を示すことしよう。

「ハ——カ」(保元物語)

此門を固めたるは源氏が平家か。

(中)

山田が八郎殿に射られたりける矢めはいづくぞ。鎧はこらへたりけるか。

(中)

亀若はいひを言はなかりけるかなど、いか計の事思ひ給はんずらん。

(下)

三例とも述部について問う表現となっている。

「ノ——カ」(保元物語)

此条あらぎなり。臆持なし。若気のいたす処か。

(上)

主格の「若氣」を問う表現となっている。

「ハ——カ」(平治物語)

此門の大將軍は信頼卿とみるはひがことか。

(中)

悪源太は候はぬか。

(中)

源太冠者はなきか。

(中)

六波羅へまいらんとおもひ、軍の左右をまつとみるはひがこ

とか。

御邊は御方とみるはひがことか。

(中)

正清は候はぬか。

(下)

金王丸はなきか。

(下)

是は左馬頭殿の君達にて御わたり候か。

(下)

人は候はぬか。

(下)

正清は候はぬか。

(下)

金王丸はなきか。

(下)

いかに、なんぢは景住か。

(下)

全例ともに述部を問う表現となっている。

「〇——カ」(平治物語)

首を獄門に懸らるゝこと前世の宿業今生の報かとそ人申ける。

(上)

官軍いつはりて引退ば、凶徒たちまちにすゝみいでんか。

(中)

源氏の大將軍、雜人にうしろをみせておちさせ給ふか。(中)

主格助詞のつかない「〇——カ」は全例ともに述部を問う

表現となっており、「ハ——カ」に準ずる形式と考えてもよさそうである。

「ノ——カ」(平治物語)

折ふし月おぼろにて、御前も御覽も分ず、吹風に草木のゆるぐに付ても、源氏の兵の追付奉るか、肝魂をけさせおはします。

(中)

右の疑問表現は、述部の「追付奉る」かどうかを問うているのではなく、追い付いた者が「源氏の兵」かどうかを問うているのである。柳田氏の指摘された「ガ——カ」の用法に相当する形式と考えられる。

また、『平治物語』には「――ガ――カ」の用法が存し、主格を問う表現となっている。

汝がきらんずるか。

(下)

また、『太平記』にも次に示すように「――ハ――カ」と「――ノ――カ」の例が存し、それぞれの用法にしたがい、区別されていたものと考えられる。

「――ハ――カ」

先日度々ノ合戦ニ高名シタリト聞ユル陶山備中守、河野対馬ハオハセヌカ。

義治ガ見ヘヌハ、誅レヌルカ、又生捕レヌルカ。

栗生、篠塚ハナキカ。

畑、亘理ハナキカ。

鹽谷殿ト見奉ルハ僻目カ。

何ニ大森殿ハ是ニ御座ヌルカ。

上山六郎左衛門トミルハヒガ目カ。

御方ハナキカ。

洗革ノ鑑ハ長山殿ト見ルハ僻目カ。

ナマバウタル人ノツカレ乞ヌルハ、夜討強盗ノ案内見ル者歟。

左馬頭ニ仕ハレヌ侍ハ身一ハ過ヌ歟。

「――ノ――カ」

雨ノ降ルカト聞食テ、

漁舟ニ燃ス居去火ノ、波ヲ焼カト怪シマル。

誓命ヲ全シテ君ノ御代ヲ待ント思フ心ノナキカ。」ト再三、

強テ止ケレバ、

コハソモ天人ノ此土ヘ天降レル歟。

右の四例のうち、「居去火ノ、波ヲ焼カ」は疑いの表現、「君ノ御代ヲ待ント思フ心ノナキカ」は反語の表現となっている。

以上の結果から、柳田氏が指摘された「――ガ――カ」の先駆的表現として「――ノ――カ」を想定することができる。

文末に「カ」を置く疑問表現、「――ハ――カ」対「――ガ――カ」または「――ノ――カ」の構図（主格助詞による用法上の区別）は『源氏物語』にも次のような例が存し、平安時代まで遡ることができそうである。

「――ハ――カ」

繫ガぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし。さははべらぬか。

(桐壺)

客人は寝たまひぬるか。

(帚木)

「――ノ――カ」

直衣着たりつらむは、いづら、宮のおはするか。

(若紫)

また、この種の疑問表現は、柳田氏が指摘されたように、主格助詞の成立とそのあり方が疑問表現の変遷に関与しているであろう。その概要を把握するために主格助詞と疑問表現について調べることにしよう。

主格が提示されている疑問表現について主格助詞のあり方とその形式について分析・整理した結果が次の表Ⅶ、Ⅷである。

不定方式では主格助詞により次のような使用例が認められ、

「――ハ――カ」

このやうに人の思ひ歎きの積る平家の末はなんとあらうか。

(天草版平家物語)

「――ハ――」

此ハ直何ラ。

(今昔物語集・二十六)

「――ハ――ゾ」

彼ノ女人ハ、何シテ此ノ寺ニハ来ルゾ。

みてみると、『今昔物語集』、『保元物語』、『平治物語』にあつては、概ね「ハ―カ」は主に問いを、「ノ―カ」は主に疑いを分担しているようである。また、『天草版平家物語』では、「ハ―カ」は問いを分担し、「ガ―カ」は疑いならびに反語を分担している。

③ 特定方式における反語の表現に限ってみてみると、『今昔物語集』においては「ハ―ヤ」、「〇―ヤ」の占有率が高く、『天草版平家物語』では「ガ―カ」の占有率が高い。

「ハ―ヤ」については『今昔物語集』（巻三十一・十四）に次のような「ヤ―」と「ハ―ヤ」との等価的用法が認められる。

【田ニ水ヤ有】ト見セケルハ、埋リ埋マンガ為ナリ」ト云フヲ聞クニ、……………「彼ノ後ノ方ニ有ル田ニハ、【水ハ有ヤ】ト見ヨ」ト云ヘバ、

『今昔物語集』には主格助詞「ハ」がついた問いの疑問表現「ハ―ヤ」が多数認められ、また、主格助詞がつかない問いの疑問表現「〇―ヤ」も多数認められるのである。『今昔物語集』以降の「ハ―ヤ」（問いの表現）の後退は、その後「ハ―ヤ」、「〇―ヤ」が反語の表現として使用され、固定化されていったことにその要因をもとめられるのではないかと推察される。

また、特定方式、不定方式の「ノ」と「ガ」との主格助詞については、「ノ」が先行し、それに「ガ」が続ぎ、やがて「ノ」が後退するといった推移をみてとることができる。

(六) まとめ

院政期から室町期の資料を通し疑問表現の推移をながめてみると、不定方式、特定方式において「カ」の文末用法の拡大していく実態がより鮮明となった。文末用法の「ヤ」は『今昔物語集』の会話部の問いにおいてのみ文末用法「カ」に対し優位にあったが、その後文末用法「カ」に圧倒され、反語的表現として固定化されていくのである。

また、主格助詞のあり方と疑問表現の形式との関係について分析した結果、時代の推移（院政期から室町期まで）のなかで「ハ―カ（ヅ）」は問いの分野に、「ガ―カ（ヅ）」は疑い・反語の分野に収斂されていくさまが看取されるのである。

〔註〕

- (1) 『日本語疑問表現通史』（平成二年・明治書院）一三二頁。
- (2) 『日本語疑問表現通史』二二頁。
- (3) 『日本語表現の流れ』（平成五年・岩波書店）一九七頁。
- (4) 『日本語表現の流れ』一九二頁。
- (5) 『室町時代の国語』（昭和六十年・東京堂出版）一三三頁。

資料の引用は次の文献による。

- 『今昔物語集』（『今昔物語集』(1)～(4)・日本古典文学全集・小学館）
 『源氏物語』（『源氏物語』(1)～(6)・日本古典文学全集・小学館）
 『保元物語』（『平治物語』（『保元物語 平治物語』・日本古典文学大系・岩波書店）
 『太平記』（『太平記』一～三・日本古典文学大系・岩波書店）
 『天草版平家物語』（亀井高孝 阪田雪子翻字『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』・吉川弘文館）